

本書はタイトルのごとく、戦後歴史学・戦後民衆思想史の大家である安丸良夫自身が語る民衆思想史と、歴史学・思想史学・宗教学・民俗学などの後進研究者（戸邊秀明、孫歌、阪本是丸、島園進、小松和彦、ひろたまさき、喜安朗、臼杵陽、磯前順一）の間の「対論」の書であるが、実はその基調には大きな仕掛けが存在している。すなわち、安丸自身が歴史研究者・知識人と「ずれ」存在である民衆をどのような認識論や方法論で記述してきたのかをあからさまに語り、次いでその安丸の記述したテキストを読者である後進の研究者がどのように「ずれ」ながら読んだのかがのべられ、最後に戦後学術の認識論や方法論について省察せざるをえなくなるという仕掛けである。その意味では、本書の主役の一人は無論安丸良夫であるが、安丸思想史という戦後歴史学を代表する良質の「媒介」を通じて戦後学術の認識論・方法論を問いかけるものとして本書は存在しているのだ。実はその仕掛け人である磯前順一自身が、自らもその仕掛けに誘われて思索を深めていったに違いないことは、「安丸の研究と接するなかで、実証主義というものをこのような欠如態（自分がテキストを読み尽くせないという恐れ 引用者）が生み出す全体性認識への限りない意志として考えるようになっていった」と吐露していることに明らかな通りである。

安丸自身の語るところによると、学術において「ある立場性をもつということと、対象に即した実証性を獲得するということとのあいだには、不可避のジレンマがある」が、それは「根源的には私たちの生そのものに根ざすジレンマであり、そのジレンマはむしろゆたかな対象把握を可能にさせるものである」。研究者がここまで、あけ透けに自らの研究のジレンマについて語ることは珍しい。「民衆」という、歴史家にとっては「他者」として向き合うほかはない存在を、「史料」によって記述し、その作品が大きな反響をよんできた研究者ならではの発言というべきだろう。そして、これに対して、後進の研究者もそれぞれ個別の論点では安丸への批判をのべつつも、しかしながら、たとえば以下のように語ることで、認識論的なメタレベルでは共振させられているのだ。「自身が引き裂かれるぎりぎりのところにとどまって緊張する『関係』の持続と自覚こそが、安丸の豊かな作品群を生み出す原動力」（戸邊）。「他者としての『民衆』を論じるときに、（中略）歴史家はつねに自分の存在被拘束性をあらわにしなければならない」（孫歌）。「安丸少年には共同体からはずれて個の意識をもちやすいような資質があった。だが、それは国家を聖化する宗教性にも、国家を相対化する宗教性にも向かいうものだった」（島園）等々。そして、今度は安丸が次のように応答することで、ほかならぬ現代の学術知の認識論的陥穽が提示されていくのである。「歴史的世界の全体性を措定しようとすることは、（中略）自分は世界についてまだほとんど何も知らないままに世界と向き合っているのだという事態の自覚化のこと」。「『実証』は、権力がもたらす、ほとんど無意識のうちに遂行されている全体化作用について敏感でなければならない」。

本書は、何よりも研究者が一般的には隠蔽するか語らない、かくなる認識論・方法論的言説の交錯＝「対論」によって編まれた書である。したがって、本書は単なる安丸良夫論として読まれてはならない。付言するならば、安丸があけ透けに語っていることは、恐らく現在の安丸の地平から語られた自己論であり、それは六十年代～八十年代の安丸の認識論・方法論とは「ずれ」ている筈だ。だが、その「ずれ」や、後進の研究者の「誤読」や「ずれ」も、読む者をして、むしろ心地よさを感じさせるものとなっているのは何故なのか。それは、本書のような形式によって、押しつけがましい形ではなく、戦後の学術的な

してきたことに、われわれが誘われていくからであろう。「全体性」がその際のキーワードであることは、本書の最後に位置している磯前の次の発言によって、静かに告げられることとなる。「安丸のいう全体性もまた均質化されることのない異種混淆的な集合体として差異をあちこちに孕みながら同一性を志向するものである。その内部を構成する個々の主体は互いに曝され、他者との関係において脱中心化されていく」。戦後学術がポストモダンの議論にたどり着きつつも、すっかり忘却してしまったかに見える「全体性」との緊張こそが、恐らく本書の「対論」全体が問うているものなのだ。